

海に想う

山 枝 雅 信

私は横浜に住み、幼児のときから何十年と夏を葉山の海岸で過ごしてきたので海の想い出はきわめて多いが、二つのことを記したい。

第一は二年前のことである。お茶の水女子大学が行なわれた「児の自然認識」の研究会に参加して、砂遊び・水遊びの事例報告を聞き、さらにまんとみ幼稚園をたずねて、元気な子ども達に接したとき、遠い昔の海が、急によみがえって強く心に迫るのを感じた。

砂場の遊びはせせこましいものとの予想に反し、砂を掘り、盛り上げるために渾身の力と強い意志がそそがれ、そうして作られる山や川や海は大きいスケールが示される。水は泥水であつても子どもの手や指の間を流れるところに清冽であった。私は子

どもが水や砂の理を身体で悟り、これを物に適用して遊んで生長する姿を知って、「自然は神が人間に与えた恩物ではないか」という今まで探し求めていた科学技術の心を教えられたのであった。

第二は少年期以後の私に、やはり葉山の海で天文学・水泳・ヨ

ット操船を教えてくれた父の海の生涯である。父は日本の海運興隆期の船長であった。その学生時代より内村鑑三に師事し信仰を教えられ弟子として愛された。

船乗りとクリスチヤンとは日本では一見不思議な組合せのようであつたが、そうではなかった。それは多くの人命と高価な船と物資を安全に搬ぶためには、まず遠い不動の天体を観測し精確な計算で大洋上の位置を知り、暴風雨の中で波浪を相手に果敢な操船をなし、陸に近づけば浅瀬を避けて船を慎重に港に導くその仕事は、大いに信仰にたすけられたのである。

内村鑑三には、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、メキシコに弟子達の集団があり、父は先生の代理として航海毎に訪問して喜ばれたと聞いている。あらたまつてする説話は不得手な父であったが、広い海を危険と困難にたえて祈りながら航海すること自体が、恩師の教えと愛を雄弁に伝え、また恩師の心を広い世界につなぐことになったようである。津守教授がミネソタ大学に留学中、内村鑑三のアメリカ人の生涯の友であつたD・C・ベル氏の身内を尋ねられたとき、「内村からのこの贈り物をキャブテン山耕が

ととけてくれた」と象牙の人力車の土産物を示したそうである。

おわりに内村鑑三の海の詩を紹介する。

配慮は我的英気を挫けり
辛勞は我的思惟を压せり

我精我筋まさに縮せんと欲す

濤上風に逆う時我に胆力生る

船頭舵を御するとき我に恐怖なし

活動を要する我的生は

この軟、この弱にたうる能はざるなり

海よ、海よ、我を寛くせよ
俗界の權者我を囚にし
その古俗と旧習とは我を檻にし
我をして我が羽翼を伸し得ざらしむ

我はかもめの自由を慕うなり

我はかいづぶりの飛力を羨むなり

無窮の靈を有する我は

この圧迫狹隘にたゆる能はざるなり

海よ、海よ、我を清くせよ

腐敗は平原都城を襲えり

山間の仙境また陋習に化せり

浩然の氣、我今これを全土に求めて得ず

洋面いたるところ酸氣多し

海上波静かなるとき風に香味あり

清淨を愛する我の靈は

この穢、この汚にたゆる能はざるなり

海よ海よ我を強くせよ

この雄渾な詩は、明治二十七年に出版した『地人論』の「海國」の章に載せられている。

山国は人をして自由独立ならしめるが一方人を頑固にし、平野は富の源であるが闘争の場となり市街地は腐敗を起す、しかし海は我々を清く廣くし世界の民であることを知らす、と説いている。そして同書終りに次のように言っている。日本の港で米国に向つて東に開くものとアジアに向つて西に開くものが多いのは、日本が米国とアジアの媒介者としての位置を確定するものである。室蘭・横浜・四日市は東に、神戸・下関・長崎が西を向く……。日清戦争の直前にこのように日本と海に期待した内村鑑三は一生を通じ、今でも天国に向つて開く港と海と航海について教えつづけている。

(関東学院大学)